

# 蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆  
近藤龍弘

〒940-0052  
長岡市神田町1丁目4番10  
TEL.0258-32-2811

◆スタッフ◆  
小林国二・小林善秋・高橋翠・室賀清輝  
高橋利春・加瀬由紀子・屋代健  
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信  
後援・株式会社アサヒ  
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さままでご覧ください

## 茄子や胡瓜の

## 牛馬の旅のごとく

翠巖 弘

暑中御見舞  
申し上げます

盂蘭盆の季節になりました。昔はお盆には床の間などに精霊棚を作り、マコモのゴザを敷き、竹を立て縄を渡してそこに

方をお迎えしたものです。最近では仏壇の前に簡単な精霊棚を作られる家庭が殆どなのですが、今日も変わらず伝承されているのが、ナスにオガラや、楊枝で足をつけた牛やキュウリの馬を精霊棚に置かれていることです。御先祖様が疲れないように、牛や馬に乗って帰ってこられるようにとの心づくしです。現代ですら自動車の方が速くしたら自動車の方が速くてよさそうですが、牛馬の方が日本人の感性に合っているのでしょうか。現代では飛行機、新幹線、高速道路などと目的地には短時間で行けるようになりました。また「時は金なり」とばかり、子供から大人まで絶えず何かから追われているようで、私の子供の頃からみると時間に、心にゆとりが持ちにくくなっているように感じます。

など忘れたようです。そんな折、久しぶりに一般国道、三国街道をドライブする機会がありました。擦れ違う車も少なく、ゆつくりと景色を楽しみながらのドライブでした。道中の町の生活感、昔は賑わっていたドライブインの変わり様、昔宿泊した猿ヶ京温泉等々、思い出、懐かしさで一杯でした。

希望舞台プロジェクト

# 焼け跡から

西村 洋作 蔵王山の富士より  
由井 敏 脚本・演出



昭和二十年 学童疎開中、東京大空襲で家族を失った子供たちと近郊寺を復興しようと奮起、新米和尚の物語。文男(ア)は今なお行方不明の両親は生きていないと思いつつ、戦争が終わったから親三人で蔵王山に登る約束を信じている。やるなら勝つ戦争をやれと大人のほめられた戦争をなさる。運平(ア)は、防空壕の中で焼け死んだ両親と妹を自分の手さげた。貞夫も、タタミの上で隠りたいというミ子も、その日の食べものねぐらを探す同じ孤児であった。寺の跡地を拒否して軍隊に入った大善は、敗走し追われるままに蔵王の荒野をさまよひ復員。お国のために、死ぬ時は緒と誓った親友の勇敢な戦死を、帰国して知らされた。

あらすじ  
平井 愛子  
安岡 和弘

戦後、焼け跡が残り、上野原の裏側で野良犬のまじり合いされる孤児ア、ルーフ・澤田中組と出逢った大善、残飯を拾い集めて、リンをみんまで分け合って食べる孤児たちの姿に感動かされて、借物の自分の寺に来ないかと誘われてしまった。戦争は終わったが、新米和尚と孤児たちの、生きるための戦争が始まった。



2015年10月31日(土) 13:30 開演 14:00 (終演 16:00)  
主催 「焼け跡から」を創設する会  
後援 長岡市 長岡市教育委員会  
長岡市社会福祉協議会 長岡市西側地区会  
推薦 長岡市仏教会  
長岡市 長岡市教育委員会  
長岡市社会福祉協議会  
長岡市西側地区会  
長岡市仏教会  
～お問合せ～  
090-5409-1450 尾崎

戦災孤児と曹洞宗の僧侶であった故藤本幸邦老師との実話に基づく舞台「焼け跡から」ポスター

線香立て・益提灯のほか、ソーメン・野菜・お菓子・精進料理など、先祖様が供えられ、御先祖様

『あわてるな昔はみんな歩いてた』の言葉もあります。ナスやキュウリの牛馬は、日本人の心のどこかに憧れがあるので、現代に生きる私共、目的の地に早く着くことだけでなく、たまには可能な限り、のんびりと道中を楽しみたいものです。

# 【日々精進(二十九)】

## 仏縁の有難さ

近藤真弘

今年(2020年)は戦後七十周年の年になります。テレビや新聞では、この節目の年に戦争に関するニュースが連日報道されています。

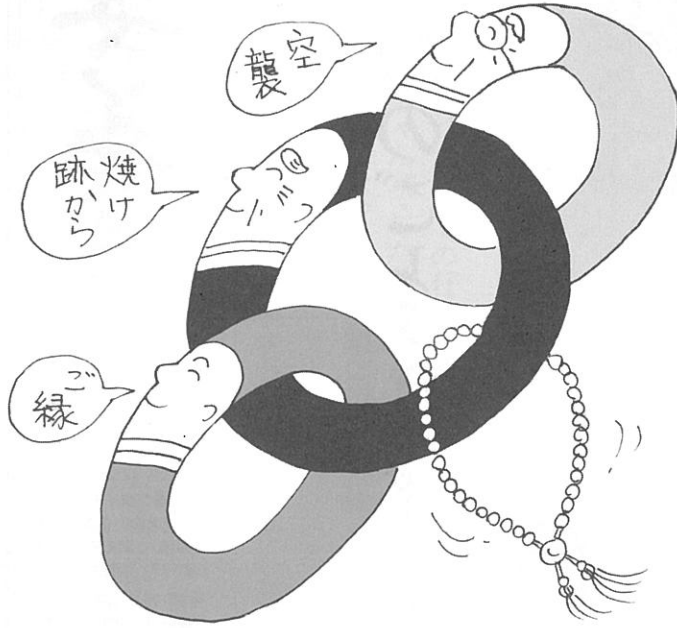
長岡も空襲にあい、多くの尊い命が失われました。私は当然ですが、直接戦争を体験していません。私の両親も戦後の生まれです。両親は戦後の生まれと言っても、まだ直接戦争の爪痕が残る時代であり、同じ戦後でも我々の世代、所謂戦後の高度成長期の後に生まれた世代とはまた違います。

しかし、我々の世代にはまだ多くの戦争を経験した方がおられ、直接そのお話を伺うことが出来ません。しかし、今後は時代の流れと共に、当然のことながら、戦争を経験した方は

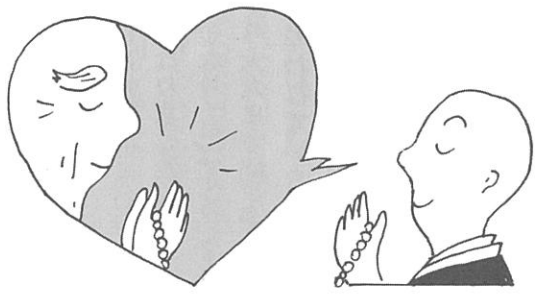
いなくなっていくと思います。私たちの役目は薄れゆく記憶を確実に次の世代に残しておくことです。

そんな中、長岡市不動沢の満光寺御住職高橋英寛老師よりあるお話をい

ただきました。それは、我々曹洞宗の地元青年僧の集まりである、長生会で劇団を招致して、舞台をやってみないか。というお話でした。舞台は「焼け跡から」というタイトル



で、内容は戦後、被災孤児と曹洞宗の僧侶である長野県の故藤本幸邦老師の実話に基づくお話です。藤本老師は言うまでもなく、安善寺にも大変ご因縁があり、私が仏門に入るうえで最初の得度のお師匠様でもあります。思い返せば、私が初めてこの季刊誌に投稿したのは平成十二年の正月号で、当時、大学三年生の時でした。内容は藤本老師のお付きで、中国に行かせていただいた話でした。藤本老師が寄付を募り、中国の貧しい村に小学校を建て、開校式に招待され伺ったその地は、外国人が村に来るのが初めてというくらい田舎で、衝撃と共に様々なことを考え、学ばせていただいたことを今でも鮮明に覚えています。今思い返しても、当時九十二歳を迎えた藤本老師にお供させていたいただいたこの経験は、大変得難く、本当に貴重



な時間でした。藤本老師には、その後も僧侶として歩み始めた私に多くのことを御教授いただき、素晴らしい受業師(得度の師匠)に恵まれた有難さ、仏縁に、感謝の念が絶えません。そんな藤本老師のお話であるこの度の「焼け跡から」という舞台、是非とも、長生会で招致したいと、決定し、有難いことに私が実行委員長を勤めさせていた

出来上がり、私も色々とお知らせさせていたいただいておりませんが、そんな中で私も思いもかけなかった事がありました。それは、チラシを持って、月経の際に舞台のお話をする、何人かの方が、ご自分の戦争の経験をお話しされたことです。普段は聞いたことのないそんなお話を何人かの方に伺い、私自身、すごく新鮮で、有難い気持ちになりました。劇団招致という初めての活動の中で、私自身、多くのことを学び、多くの有難いお話を聞かせていただくことが出来ました。藤本老師は平成二十一年十二月に御遷化されました。それから五年半の時を経て、またご老師とご因縁で自分自身が成長させていただいた事はほんとに有難いことです。お話をいただいた高橋老師、そして関わるすべての皆様に感謝いたします。

若いときに、修行を積まず、智慧の富を得ないならば、魚なき池の老鷺の如く、空しく滅び終るであろう。『法句抄』

# 亡き妻との思い出

長岡市川崎 増田和久

今年の一月二十一日、家内の増田ミヨシが残念ながら若くして亡くなりました。ガンにより末期でした。ガンにより末期であろうと診断をうけた昨年の終わりにから自宅で療養しておりましたが、体の自由がよいよ効かなくなり入院してからは数日での最期となりました。

私もある程度覚悟を決めていたとはいえ、まだまだ危篤という様子ではなく、前日の夜にも落ち着いた様子で、普通に「じゃあまた明日、おやすみなさい」と挨拶して別れました。未明に病院から連絡を受け、駆けつけた時にはすでに眠るように息を引き取っていて、あつけなく、信じられない別れになってしまいました。

家族が誰も死に目に会えなかった状態でした。



で、最期に本人に直接、今までありがとう、と感謝の言葉を言えなかったのが一番悔やまれました。

私たちが夫婦は結婚が年齢的にはかなり遅かったと思いますが、平均寿命からするとまだ人生半分以上を過ごしたところで、もう半分の人生を一緒に暮らしましょうね、と話しました。家内が年上でしたので女性の方が長生きすると考えると、だい

たい同じくらいに死ねるからちようどいいかな、などとふざけて話した事もありました。

しかし、現実には結婚から九年と少しで家内に先立たれてしまい、私もそうですが、本人が一番、予想していない人生だったと思います。

家内は知人の皆様からも言われますが、とても穏やかな、他人に思いやりのある女性でありました。私がぐうたらな人間なので注意される事もありませんでしたが、常に優しく接してくれて、あまり喧嘩らしい夫婦喧嘩もした覚えがありません。

若い頃から登山が好きで、色々な山でかなり本格的な登山もしていたようでしたが、結婚後は私が初心者な事や仕事の忙



しさなどから、ごくたまにハイキング程度の山にしか付き合っただけであげられませんでした。

二人とも美術的なものが好きだったので美術館等にもよく行きましたが本人も絵やイラストが得意で、挿絵的な仕事を頼まれていた時もありました。時々ノートなどに描いている絵がかわいらしく、仏画などにも興味を持って取り組もうとしておりましたが、私の会社の事務仕事や家事に追われて、趣味にも力をいれられなかったかと思う

と悔やまれます。もつと元気な時に好きにさせてあげればよかった、と後悔もしています。ただ、私たち二人でお互いに今まで出来なかった良い思い出を与えたり、もらったってきたかなあと家内が思ってくれている事を祈るばかりです。私自身は感謝の気持ちでいっぱいです。

最期に言えなかったけれど、本当にありがとう。感謝の気持ちを持ちながら、亡くなった家内の分まで健康に生きられるようこれから努力していきたいと思っています。

# 先立つものは導師なり

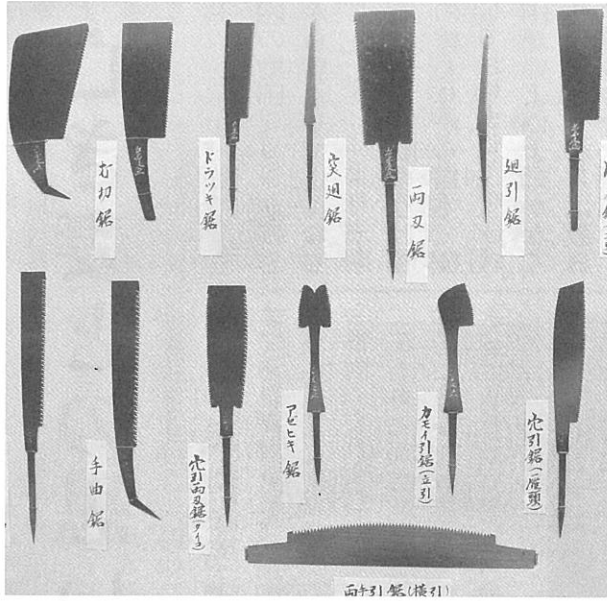
「医療の心を考える会」代表  
「仏教看護・ビハーラ学会事務局長 原 武嗣

「丸太切り大会」のイベントが行われる長岡市三島地域は、かつて大工用手引鋸の製造が地場産業として盛んでした。

中屋庄兵衛が会津若松で鋸の鋸工法を習得し、一八四二(天保十三)年に帰郷して開業したことに始まりませす。四人の弟子

を育て、その弟子たちがさらに徒弟の養成につとめ発展。一九八〇年代には六十ほどの事業所が活躍していました。

だが、技術革新で焼入・研磨された薄銅板が供給され、これを利用して替刃式・使い捨て鋸が普及し、伝統的な大工用鋸の



需要は急減し地場産業としては衰退することになりました。

私の父母兄も職人さんたちと鋸製造を営んでいました。私は末っ子でその立場にはなかつたので

すが、一九五六年(昭和三十一年)正月の弥彦神社・二年参りの事故(死者二四名で父と兄が亡くなり、高校二年で中退し家業を継ぐこととなりました。

しかし、未熟ゆえ、義兄がしばらく面倒を見てくれることで私は復学。さらに無理に願って大学に進学、一九六四(昭和三十一年)三月卒業とともに郷里に帰りました。

零細企業ながら経営に務め、結婚し三人の子を授かりました。次男が高校二年生で発病し、一九八八(昭和六三年)に十七歳で亡くなりました。

当時、ビハーラ提唱者の田宮仁・近藤龍弘・木曾隆など先生方が医療福祉関係者や一般市民を対象に公開講座を開かれていました。子を亡くした母・父として講座に参加

したことがビハーラとの出会いでした。開設に向けた講習を受け、妻はボランティアとして参加させていただくこととなりました。その妻が病み、二〇〇一(平成十三年)にビハーラで最期を迎えました。六十歳まで半年を残してのことでした。

妻は病床で俳句を作っていました。亡き後、小さな句集にして、お世話になった方々に読んでいただきました。思いもかけないことに、歌人の田宮朋子さんが、一つひとつの俳句に添えて短歌を創ってくださいました。二

〇一二(平成二十四)年の第七回仏教看護・ビハーラ学会で、遺族としてパネルディスカッションに参加することになり、そのことをお話ししました。大井玄先生が著書『病

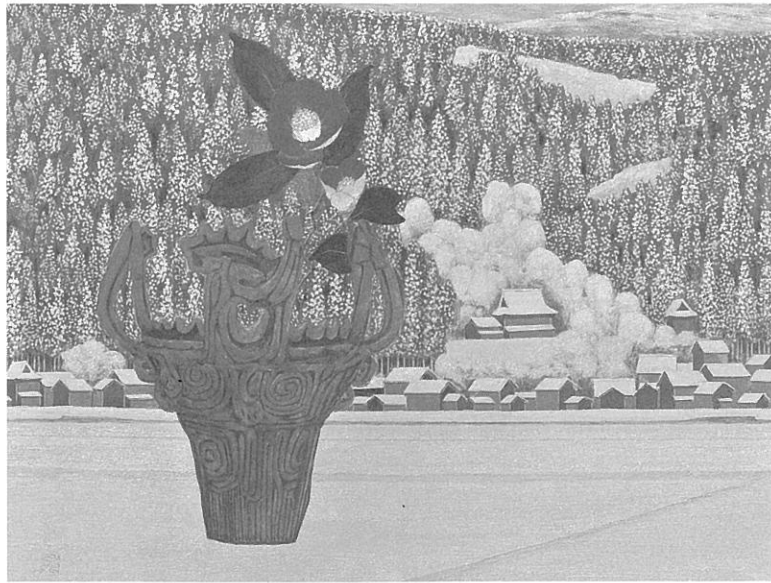


原さん自筆の絵

から詩がうまれる』(朝日新聞出版・二〇一四年発行)の一章に、「癒えずとも今日のいのちやふきのたう」を取り上げてくださいました。

長女が浄土真宗大谷派の寺に嫁いでいた縁で、ひとり暮らしの私は度々夕食をご馳走になりました。ある日、住職さんが京都の大谷専修学院の話しをされました。

二〇〇二年四月、六十四歳で京都山科別院境内の《二心寮》の六畳に二人の和室を自分の居場所として一年間の学院生活が始まりました。パソコン・



原さん自筆の絵

携帯・テレビなど持込み不可の地味な日々でしたが、生涯でもっとも贅沢な時間でした。朝から夜まで内容いっぱいのカリキュラムは私には消化不良気味で、仏教はなかなかわかりませんというところがわかりました。

それでも二学期の終わりに頃、図書館で中村元著『

マ・ブッダは仏として人格化され、：神学的思弁が諸異訳のうちに付加されることになった」と記されています。これを読んでいきました。これを読んでいきました。これを読んでいきました。

卒業後、田宮仁先生から長岡西病院ビハラ病棟のビハラ僧として、一年間の非常勤のご縁をいただきました。その後は現在まで一人のボランティアとして週に一日ほど伺っています。

### 第20回「KAKA笑の会」『楽々のらく語』



十二年目を迎えた「KAKA笑の会」。今回は新潟県で活躍されておられる元・新潟県警警部で三流亭楽々さんにお出でいただき「振り込め詐欺防止落語」を講演していただきました。



時間的には少し短いかな？ という感じでしたが、最後は「南京玉すだれ」までご披露していただき数日後には来られた方々が「とっても良かった」「もう少し聞きたかった」等々のご意見やご感想が寄せられました。また機会がありましたらお出でいただきたいとお思います。

### 旅立ち

(平成廿七年三月～六月末日まで)

江口義男様 三月九日寂

長岡市青葉台

大森作太郎様 三月廿五日寂

長岡市小曾根

村上テルノ様 四月十六日寂

長岡市松葉町

田崎シゲノ様 四月廿二日寂

長岡市愛宕町

中島竹治様 五月四日寂

長岡市新保

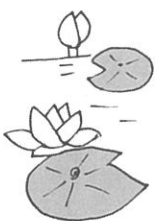
今井勝朗様 五月廿三日寂

長岡市緑町

平田 一様 六月一日寂

三条市西本願寺

ご冥福をお祈りします。



# 黄綬褒章を受章して

土地家屋調査士 高橋利春

平成二十七年春の褒章に際し、土地家屋調査士業務により黄綬褒章拝受の栄に浴しました。

五月十五日、法務省におきまして章記褒章の伝達を受け、引き続き皇居に参内し豊明殿にて天皇陛下に拝謁の栄誉とともに温かい励ましのお言葉まで賜り感激の極みでございました。

当日は、祝ってくれているようなよく晴れた日で、法務省関係の受章者約百三十人が伝達をうけたのち、妻と共にバスに分乗して皇居に参内、皇居の入口の景観、松の木々の緑の勇姿が鮮やかで初めて入る皇居の尊厳を想像させるにふさわしい出迎えてました。

幸にも一号車に配属され総勢一千人余りいる中



で入宮するのも記念写真を撮影するのも最初のグループにてさせていだきました。豊明殿は大変

か見かけないような材料を使い、仕事柄見事な御殿にて感動しました。天皇陛下はさすがにオ

お言葉でしたが心温まるお言葉で全員が緊張した十分間程の拝謁でした。これも偏に皆様方の温かいご指導ご支援の賜物と深く感謝申し上げます。今後は、この栄誉に恥じるのではないよう一層精進致す所存でございますので、何卒相変わらぬご厚誼ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

調査・計画の業務を行ってました。春、魚野川で取水口の調査をしている時の事でした。コンクリート底版に、直径十五センチメートル、深さ二十センチメートル位の穴があいていて、水路には水がほとんど無くなっている時です。銀色の光がキラキラと動き輝いているではありませんか。近づいてみると小魚がびっしりと詰まっていたのです。河原にはふきのとうがあつたので、それも摘んでその日は楽しい夕食を思いながらの帰所でした。

が消えず、測量士もあるし将来は土地家屋調査士事務所か測量会社で食べていける三十歳になったら自分でやろうと決意し、N測量会社に勤務し、三十歳で独立したものの最初は仕事もらえず、それでも不動産屋に根気よくお願いし、T不動産の初代社長から自宅の測量を頼まれ、その仕事を認められ、以後測量のみならず土地の開発なども一手に任せてもらえるようになりました。

# 旬歌 愁灯

[三十五話]

## 「V6の歌？」

加瀬由紀子



地震で崩れた世界遺産パタンの寺院

人生二度目のネパール行きで、大地震に遭遇してしまった。地震づいた？新潟県民は私とツレの二人しかないという。

東ネパールの辺境にあるヒマラヤ山脈の高峰マカール(世界第五位、標高八四六三m)ベースキャン

プのトレッキング、約一ヶ月を終えて、カトマンズによくやく戻ったのが四月二十日だった。その五日後、カトマンズ中心のタメル地区(日本でいえば新宿あたり)の本屋

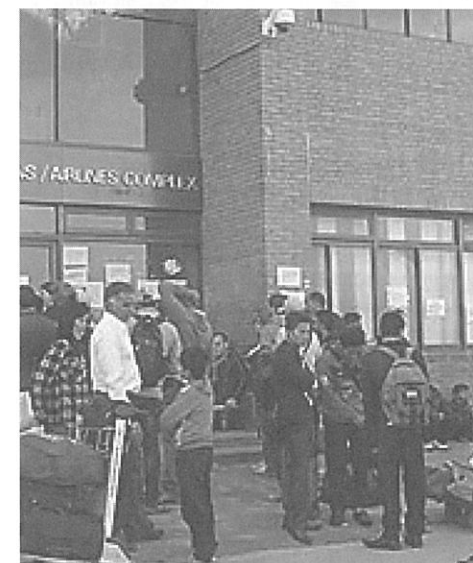
つとメニユーを用意し

に立ち寄り、お昼に日本食レストランで久しぶりのカツ丼など食べようと注文をする。退職後、まだ体力もあり、多少お金と時間もあ

て待っている。テールにお茶に続いて味噌汁が運ばれてきたその時、激しい揺れがかなりの時間続いた。テール

余震が続く中を外に出ると、崩れた壁、傾いたビル、タクシーに倒れた電柱、血まみれの人。道路は、建物から飛び出した人々で大混乱をきたし、とうてい車の通れる状況ではない。

食事をしたとき、日本人オナーが「近くににあるアンナプルナホテルに寄ってごらん。神々の山嶺」ロケ隊が泊まっているから、会えればサインか、握手ぐらいしてくれるかも。早速フロントに立ち寄ってみると「岡田准一、阿部寛、小野真千子」の三名が滞在しているという。



軍隊に封鎖され飛行場に入れぬ市民

再び、ネパールに観光客の賑わいが戻る日を願うばかりだ！

仏陀は、説き手である。修道者は、自らはげむべきである。道に入り、心を整える人は、束縛を脱するであろう。『法句抄』

ボブの独り言

# 新しい家族が仲間入り!

ボブの独り言

朝晩、さほど暑くなく一枚羽織るものがあつた方が良いでしょう。私はずっと、昨年同様に尾のほんの先だけ残して、自慢の毛をきれいに刈られてしまいました。

私が暑くてではなく、自然と毛が抜けていてお掃除が大変なことと、何処にでも行くものですから、長い毛の中に虫でも連れて来て、そのまま布団の中に入れては大変ですからね! 見方によっては、とても格好が良く、気に入っているスタイルではあるのですが...

五月の連休が終わってまもなく、いつものように朝起きて、下に降りていきましたら、猛スピードの真つ黒い物体は、新しく家族の一員になった生後



二ヶ月のシェパードの仔犬『ももちゃん』でした。

命名したのは真人君と補があがつて『ひめちゃん』にしようか? と言った時、真人君が「ヒメは王子様と結婚する人だから、ダメだよ、ももちゃんにしたなら?」のひとことに決まったそうですが、

今までのサクラやノンちゃんと違って、食事の間は勿論、時間を決めてゲージに入っていることが多いので、その時間さえ把握すれば何の心配もなく皆のいる処に来れるのでホッとしています。

最近、玄関の中に頑丈でおしゃれな柵が出来ました。入って来られる方が

決まって「凄いですね! 何対策ですか?」と聞かれます。勿論、大型犬を飼うには色々事故が起る前に対策をこうじなければならぬのですが、それ以前に、もうじき三歳になる悠真君、二番目だけのことはあつてなかなか。この前も居たと思つたら何処にも姿が見当たらず、一人で公園に行つて遊んでいたたり、お墓の奥の方に行つていたり、呼んでも返事が返つて来ないので困つたものです。

諸々と事故が起る前に、今の世の中、何が起るかわからないですからね。ニヤーン

## 編集 雑感

この編集雑感、久しぶりの担当で何を書いたらよいか悩んでいます。今回は最初に皆様にお伝えするところがあります。

それは、この季刊紙の編集委員、高橋利春さんが春の褒章で「黄綬褒章」を授章されました。大変おめでたいことで、同じ編集委員として心よりお喜び申し上げます。久しぶりの編集雑感の担当お休みさせていただいたのは(これもあるかも?)編集委員の方々の気配りと感謝しております。と言うのは平成二十四年六月頃より痰に血が混じり、二ヶ月以上経つても治らず、変に思ひ知り合の医者へ行き調べてもらったところ、肺に

癌がみつかりました。何が原因か考えましたがタバコはやめて三年以上、父は食道癌、しかし一番はストレスのようでした? 不思議なことに肺癌を告知されてもあまりショックはなく、「なるようになるさ」くらいでした。

病院を変え、新潟のがんセンターで再検査をしてみると、幸い手術で癌を摘出できるとのこと。平成二十四年十二月に左肺半分、翌年二月に右肺二ヶ所。二ヶ月の間に二回の手術はがんセンターでも珍しかったようです。完全に摘出しましたが、平成二十六年七月にリンパに再発し、現在は抗がん剤治療をしています。

何事も気持ちの持ちよう、気力、体力を充実させ毎日楽しく明るく、癌と仲良く闘っています。新しい治療薬も日々出来ているようなので期待をし、季刊紙の編集委員として、またお世話になりたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

小林善明

## お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

### 原稿の例

- 思い出話/ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて/家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください/仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、怒ったこと。